

# 下へのぼる歌 中森幾之進 一九七三年初版

## 八 南方への旅

### 1 台北昭和町教会

高千穂丸は八千余トンの大船だった。わたしひとりなら三等にするところを、父を連れているから特二等にした。部屋も食事も待遇がよかつた。四日間の航海は同室者を親密にさせる。父もふたりの老人の話しができだし、わたしは子どもたち相手にデッキゴルフやトランプを楽しんだ。こんな長い航海は初めてなので、基隆着港が待たれた。釜山に着いた時とはまったく雰囲気がちがう。南国情緒豊かな埠頭の光景に眼を移していると、「中森君でしょう」と肩をたたかれた。白い上下の背広を着こなしたF牧師が出迎えてくれたのである。「教会員にきみの顔を知ってる者がないでねえ。代表で出迎えに来ましたよ。こちらはおとうさんですか」と、まことにじょさいがない。

基隆から台北まで一時間近く、かれは牧師をやめたいきさつや、「えらいところに来たものだねえ」とわたしに対する同情や、今後への忠告をたんねんしてくれた。わたしは「ああそうですか。へえっ」と聞きづけた。台北駅頭に着くとF牧師から細かく紹介されていた役員がひとりひとり名のつてあいさつをした。F牧師は「忙しいから失礼する。大事な問題は役員の中のMさんに相談しなさい」と耳うちして去っていった。名刺をもらつたら、役員の人たちは總督府農事試験場長、古河合名台北支店長、總督府技師、高等學校教諭、神學校教授、育児院長、大學講師と、鎮南浦とはすっかり異なる、わたしと同年輩の紳士たちである。そして車を連ねてたどりついた台北メソヂスト教会は、大學教授の官舎街にある総桧造りのりっぱな牧師館であつた。前に百坪ばかりの空地があつて、そこに教会堂を建てるのだという。わたしはイエスさまは何のご用でわたしをこんな地へお遣わしになつたのか、ご内示があるまでは何もすまいときめていた。地位や名譽はこの世のこと、皆イエス・キリストによつてのみ罪許されて兄弟の交わりにはいる最も世俗的な面もあるのだ。

教会の付近に石本岩根教授夫妻がいた。ふたりの子持ちで、ご主人は高校と神學校のドイツ語教授、夫人は北大英文科で英文学を研究していた。加茂巖農学博士もあまり遠くなかった。寡黙

だがユーモアがある。米の改良で台湾になくてはならない人。夫人は神戸栄光教会の斎藤牧師の長女、古河合名支店長の大坪徹心氏は中田重治牧師の感化を受けた再臨論者で、南方への事業の進出で多忙をきわめていたが、幹事長の責任をとり、礼拝には家族総出で出席した。出口一重氏は総督府技師で一家そろって熱心な信徒。真野実夫妻は、夫人がF牧師夫人の妹さん、実氏はC S校長。小野善太郎牧師の紹介状を托された日野原通恵婦は城内繁華街のはきもの店を営む未亡人で、長男次男は東大の学生、三男は中学生。牧師館と道一つへだてた隣に高校の地理教授斎藤斎氏一家が住んでいた。書きたてるときりがない。これは役員だけだが、会員は総じて超インテリぞろいであり、鎮南浦教会とは会話の内容がほとんど別世界なのである。

台北は東京に直結していて、各派の教会があり、大物牧師がでんと控えているのも、日本人教会がたつた一つであった鎮南浦とはちがう。成沢不二男さん、萩屋薰さん一家など青年子弟六人、大学生、高校生の群れも一応そろっている。劣等牧師にイエスさまは何をさせようとしているのであろうか。福音に生きる。わかっているのはそれだけである。自分を飾らず、イエス・キリストにある罪の赦しとインマヌエルの神、聖靈の働きに委ねること以外知らぬ人間でいいではないか。失敗も行きづまりもそこには関係はないのだ。わたしはきわめて朗らかであった。牧師給は本部から七五円が送付され、教会からは二五円で一〇〇円の収入だった。

六月に男児無事誕生の電報がはいった。朝鮮の五年間に女児が早産し三日で世を去った。次が流産、三番目は丸々と成育した男の子だのに難産で死産、悲しい思いばかりをした。妻の喜びが短い電文をとおしてわたしの胸にわくわくとひびいてくる。出口兄、成沢兄と祈り会をして長男の命名をした。<sup>かずのぶ</sup>一信と。

待ち遠しい十月だった。義姉と妻と長男一信を基隆港に迎えた。船の影が大きくなるのを長い間待った。元気な三人だった。長男を抱きとつて、「神さまありがとうございました」とお札の祈りをした。牧師館に着いた時、姉も妻も期せずして言つたことは、「公園の中に住んでるようだわ」であった。幾種類もの椰子やビロード樹、バナナ、源氏かづらの紅白の花に囲まれた庭内には、花木がいっぱい植えてあり、ちょうど真赤な仏双華が咲いていた。平屋建て総桧造り四〇坪の牧師館は台所を加えると七室もあり、日本間二間で礼拝をしていた。幼児は丸々と肥り、知恵づきも早かつた。父は広い空地になつてゐる会堂敷地で朝から夕方まで好きな野菜や芋を作るのに一生懸命であった。鶏も五、六羽飼つて栄養源を作ってくれた。わたしたちにとつて生まれて始めて味わううれしい平和であった。

そんな片隅の平和の中にもわたし個人で処理しなければならぬむずかしい問題が一つあった。前任者F牧師は台灣伝道開拓の使命を担つて遣わされた人である。目先も見え計画性もある人物

だ。日本の政治の動向とキリスト教の未来を見てとつていたようだ。教会の敷地を買う時、その一部——といつても百坪もあろう——を自分の名義で買い、二階建てのりっぱな住宅を建ててそこに住んでいた。夫人の妹夫妻に育児院を経営させその後見をしていた。時局の進展と物資不足は台灣も例外ではありえなかつた。かれは嘉義の出張地の信徒の協力を得て、椰子の纖維でタワシを作る工場を建てるため、会堂敷地や牧師館建築に立て替えてある資金を至急返してもらいたいと要求していた。役員会に持ち出したが、約束とちがうことや、いま急に言い出されても処置のしようのないことなどで取り上げられなかつた。役員会とのこじれの大きい原因の一つがそこにあることが察せられた。それでかれは牧師をやめ事業に専念するつもりで、すでにその仕事にかかっていた。

かれには、わたしはお人好しに見えたのだろう。毎日のように「茶をのみに來い。話して來い」と言う。わたしは言われるとおりかれの応接間や居室の客となり、夫人が出してくれる紅茶やコーヒーをのみ、おいしい洋菓子を食べた。肝心の話になるとじょうづにそれをそらす。その点わたしのほうが役者が一枚上だったのかもしれない。応接室の片隅に将棋盤を見つけて、「むつかしい話なんかやめて将棋をさしましょう」と誘う。教会の役員会でも一番初めに出たのは前任者辞任のいきさつであったが「そのことはしばらく神さまにお預けしておきましよう。わたしたちが早く

急にやらねばならぬことは、福音による教会の平安でなければならぬと思ひます」としか答えなかつた。そのことのために心が乱れているようだ。後始末をする牧師としてわたしを招いたのだという。わたしはなんにも答えなかつた。ある日、毎日のように出入しているF牧師から内容証明の凍達が届いた。四角い文章で法律的用語を盛んに使つて、「裁判にかけてでも取つてみせるが、教会はそれでよいのか、腹をすえて返事をせよ」と書いてある。わたしはそれを文机の中にほうりこんで、将棋をさしにいった。かれはぼくの図々しさに驚いたように「あれ見たんでしょう。返事早く内容証明で頬みますよ」と言う。「毎日会つてて、先生もずいぶん義理堅いお人やなあ。ぼく、どうもあんたむつかしい手紙読むの苦手でね。そのうちなんとかなりますよ。きのうはぼくが一番負けたんでしたね。きょうはいきませんぞ。三番やりましょなあ」。わたしが駒を並べ出すと、かれもしぶしぶ対局を始めるのであつた。役員会にはとうとう手紙は見せなかつた。けんかが大きくなるだけの効果しかないと思つたからである。

昭和十五年十一月三日には建国二千六百年の記念祝祭が行なわれた。翌日からは、「祝い終わつたら、さあ働け」とばかり、隣組をとおして國民が相互監視をするように巧妙にしめつけてくるのであつた。わたしはこの際、教会も信徒も身軽になつてゐる必要を感じていた。左翼系の書籍、雑誌類は皆燃やしてしまつた。手紙や写真の整理もした。昭和十五年の秋、東京で四年に一

度開かれるメソヂスト教会総会があり、わたしはむりを押して上京した。会員ではないがこれをとおして教会の状況を確認し、また首都の様子も見たかつたのである。

アメリカからの伝道資金の送付が停止されるようになつたこと。したがつてそれによつてまかなかれていた事業の代わり財源を求める事。これが最も深刻な議題となつた。時が時である。この矛盾した命題は答えられない課題なのである。わたしの生活費七五円と建築費年賦償還もその中にはいつているのであつた。

わたしは祈つた。愛くるしいむすこの顔や、年老いた父の顔、「生活のことはわたしに委しておきなさい」と言つてゐるような妻のけなげな顔が浮かぶ。役員やFさんの顔が浮かぶ。三日間祈つた結果、わたしは中村伝道局長と財務局長に台北メソヂスト教会への送金を辞退し、「独立自給でやつてゆきます」と決意を告げた。

それは教会の死活の問題だから、帰つて幹事會と慎重に審議するようにと、ふたりともわたしの決心をまともにとつてくれなかつたが、あえて固い決意を告げた。わたしの頭は単純に働いていた。「アメリカから資金が来なくなつたら教会はつぶれるのか」との第一問と「おまえはどうする」との第二問であった。しごく簡単ではないか。イエス・キリストがわたしに活きていたもうかぎり、神の福音を説く。日本人一億人が聴き手ではないか。そしてわたしはあぜ道を通つてきた。七五円

来なくなつても、二五円あれば生活してみせる。「主よ、信頼してお従いします。妻も父もきょうのために訓練されたような信仰の体験を持つております」。わたしは両局長にいんぎんに「國家から強制されて困窮に追い込まれるのでなく、イエス・キリストへの信頼を身をもつて証したい。何ものもこわくない教会をつくる絶好の機会である。七五円は他の困つてゐる教会にあげてください。もしできればFさんの立替金は一度に払つてあげるのがよいと思います」と言つて総会議場を辞去した。右往左往している人々の中にいて、わたしは清々しい気持ちであつた。腹の底から戦いの意欲がもり上がつてくる。もう東京に用はない。西下して豊中に藤井炉草先生をたずねた。同級生の戒能、松本両牧師も同道した。藤井先生は表千家流の茶の宗匠でもあつた。信仰談に花の咲いた後、「おうすを一服さしあげましょう」と言つて、和服に白たび姿で準備をされ、わたしたち三名は本格的な茶席の客とされてしまつた。

茶席のことばのやりとりから、わたしは台北へ帰つたらお茶をしようとした決心した。感動したのである。最小限必要な茶道具を買って台北のわが家に着いた時、妻はただあきれて物も言えぬと言つた。一歳の子どもは半ヶ月も留守にしたおやじを忘れず抱きついてきたが、与えるみやげがだ菓子にすぎぬのを恨んでいるように見えた。

父と妻を前にして、七五円辞退の心境と決意を語つた。ふたりともしばらく黙つていたが、父

が言つた。「なんのお金なんかいるもんか。敷地に芋と野菜を作り、鶏に卵を産んでもらえればいいよ。バナナは食べ放題だしな」妻は父のように簡単な楽観論ではなかつたが、「主の思し召しなら、それだけでやります。台所のことはわたしに委せてください」。

幸いにも子どもが親に似て胃腸がたいへんじょうぶであった。家族そろつて食物のことにくふうをこらした。クリスマスも近いころ、幹事会に援助辞退の説明をし、「いよいよ真のキリストの教会を強くしていこう」とすすめた。みんな開いた口があさがらぬという面持ちであつたが、わたしの真意を深くうなずいてくれた。「教会も非常事態です。総会を開いて月定献金を二割増額して牧師給に入れようにしましよう」との提案を私は拒否した。戦争拡大は必至だ。「まにあわせの考え方を清算して、日本の悩みを積極的に負う教会になりましょう」と強く希望した。昭和十五年のクリスマスは主に喜んでいただけたと信ずる。老人から子どもまでが、日本疊の牧師館にいっぱいになつて、イエス・キリストの誕生を純粹に自分の新生のように喜びたたえた記憶が、三〇年を経て、わたしには鮮かに残つている。

年が明けて二月になつた。メソヂスト教会伝道局から一通の手紙を受け取つた。「昨秋の総会で中森牧師をとおして、台北教会の決意を聞いた。非常事態の中でのことに外地の教会で独立してやつていくのは困難と察するが、聖靈の導きと信じ、来たる四月から独立教会とする。別途の

送金はF氏の立替分と独立を祝する心ばかりのものである」。右のような単純な文意である。それ以上何もいらぬ。幹事会もひとりひとり信仰深く、物わかりのいい教養人である。本部の意志を受け、牧師と一緒に、信仰の戦いを進めること、F氏にはさつそく返金していくさいの関係を断つこと、教会総会を開き全員に決意を促すこと、祝金は全部建築費の支払いに充当し、その談合は幹事に一任のこと、牧師謝儀は努力して従前の額に近づけることなどを決めた。

三月に開かれた教会総会はこれらを可決して新年度の役員を選んだ。F氏の義弟に代わつて水産課の役人である成沢氏が役員になつた。四月の新年度の総会で、「会堂敷地を遊閑地を見られることはあぶない。たとい小さくとも会堂を建てる募金を始めよう」との議が出た。奉賀帳を回したら、十分の一くらいの献金額が書きこまれた。わたしは毎月一〇日間くらい、基隆、嘉義、虎尾、台南、高雄を巡回していたので、奉賀帳の予約金もぐんぐんふえていった。会堂敷地からは、本来の百姓にかえつた父が、精根を傾けて作る野菜がみごとな収穫をあげる。父はそのでき栄えが自慢で、信徒のだれかれに配給するのである。わたしたち家族も卵と新鮮な野菜とバナナで栄養に不足することはなかつた。

ただわたしの仕事がやたらにふえてくる。隣組の役員、防空隊の中隊長、在郷軍人会役員、キリスト教奉仕団常任理事等。わたしは身体的に、能力的にむりとわかっていた。それで五月から、

台南に親友戒能團平牧師一家を招いて、南部地区をかれに託した。台南の劉青雲一家がよくめんどうを見てくれた。

## 2 無為にする

わたしが毎日きりきり舞いの多忙の中に、朝一時間早く起きて風炉の前にすわり、空点前からでまえをするのを妻は、物好きにもほどがあると冷たい眼で見るのである。藤井先生の点前を見てから、帰台後近所の奥さんの紹介で、裏千家の加藤宗匠のもとに通っていたのである。毎週一回集まるのはお嬢さんや奥さんたちばかり。黒一点のわたしが国防服で熱心に通うのを、みな奇異の眼で見ていた。このころはだれもかれも忙しそうで、病人以外は何かをすることで、自分に忠君愛国を言って聞かせているような有様であった。わたしも前言したように地域共同社会の今日的課題の分担を多く持たされている。神を信じ、イエス・キリストにある共同体から見ると、大きい否定の前に立たされながら、自分たちの視野が狭くされているために、減びに向かつて突進している隣人に否が言えなくて、矛盾に苦しんでいた。キリスト教界も、キリスト教徒も、たぶん同じではなかつたろうか。わたしは、他人ではなく無氣力な自分自身の上に下されている神の審判が、この孤独感であると受

け取っていた。行為をことばで意味ありげに言いつらうことをやめよう。その週に習った点前を、五日間人のまだ眠っているうちに起き出て、聖書を読み祈りを捧げ、正座して一時間空点前をするのである。無心にすわっているようでも、雑念がはいるとすぐ点前をまちがえる。最も親しい家族たちからさえ無意味に見える行為の中で、わたしは清々しく生きる経験をしていたのである。そのうちに竜安坡地域青年団の有志の懇請に応じて、わたしは台湾人の青年団長になり、夜になると彼らの集まりに狩り出された。仲間のひとりとして何でも打ち明けて相談してくれるのがうれしく、聖書の勉強の時間をさらにして悔いる気持ちもなかつた。

昭和十六年十月十八日に第三次近衛内閣が総辞職して、東条英機陸軍大将が現職のまま、内閣を組織した。きたるべきところへ來たのである。戦争の準備完了。口実を待つばかりとなつた。わたしは幹事会にはかり、会堂建築中止、すでに献金している人には返金、新しい申し込みは取り消し、それよりも信徒の交わりを篤くするようにすすめながら、奉賀帳を持って全島を金を返して歩いた。また裏庭の一隅の防空壕を強化し、老父や妻子の生命を機銃や爆弾から守ることにつとめた。わたしは外にばかり出て、家にいるのは朝の空点前の時間くらい。十二月八日がやつてきた。天皇の英米両国に対する宣戰布告、日本空軍ハワイ真珠湾空襲、米戦艦主力撃沈、軍艦マーチがラジオから大きく流れた。一日おいて十日にはマレー沖海戦、英二戦艦撃沈、日本軍グ

アム島占領、フィリピンに上陸と、軍艦マーチが高々となつた。こうして天皇の八紘一宇の皇威は十七年ミドウェイの敗戦まで国民を酔わしたのである。

人間といえば抽象的になる。わたしと言おう。理性的にも信仰的にもこの戦争は軍人とこれと結託する官僚、それに戦争経済でもうかる産業界の芝居と、百も承知している。ご用学者が天皇即國家論を持ち出しても、それは日本が今やっている戦争とは別個の心理問題だ。ところが民族共同体というか、同じ日本語を話し生活様式を同じくしている者の親愛感というか、毎日、新聞をにぎわす「暴支」「鬼畜」という敵国への呼称がだんだん気にならなくなる。遺骨を迎えると心の底から悲しみが湧く。わたしが死んで、老父と妻と三歳の一信が残される事態がいつ起ころともわからぬではないか。

台湾基督教団の統理になつた上興二郎牧師は孤高の聖人であった。たびたびわたしをたずねてくれたが浮き世のことはほとんどその口から出なかつた。「今コリント前書一五章の復活の研究をしている」とか、「日本の海軍は、きみ、三年暴れたら燃料がなくなるんですよ」とか、「総務局長はご苦労さんだが、陳伝道局長や劉財務局長とよく相談して、彼らの讃美歌が刷れるよう、総督府文教局から紙を取つてくれたまえ」とか、そんなことをぽつりぽつりと話して帰つていつた。

台灣基督教団というのは、次のようにして作られたのである。ガダルカナルの敗走以来、日本

本土も空襲圏内にあり、内台の航路も危険にさらされ、台湾は孤立したようなものだった。わけても狂氣じみた天皇主義、軍国主義は、キリスト教に向かつて攻勢をとつていた。こうした時局に追いつめられたように、日本基督教団台灣教区はそのままにしておいて、台湾の長老教会と日本基督教団とが合同して、一つの宗教法人を作つたのである。案文は塚原要牧師とわたしが原作し、上牧師と陳牧師に見てもらつた。泥縄であつた。

それでもまだなりに教団は成立し発会式をあげた。しかし、総務局長として基隆から屏東まで数回巡回し、文教局にねばつて讃美歌印刷用紙を取つただけで、わたしは召集令状を受け取つた。あとのことは上牧師や後藤総幹事に依頼して、妻子に見送られ、台北歩兵第三連隊の営門をくぐつた。日本刀をぶら下げ、拳銃を肩にかけた陸軍少尉を、むすこは大将をみるような目で見てくれた。

### 3 召集令状